

## □ 合唱

## 戸ノ下 達也

2023年の合唱界は、国内外の情勢が色濃く反映された一年となった。

新型コロナウイルス感染症は、内閣が1月にイベント開催制限緩和、2月にマスク着用の個人判断を発表、4月27日付け事務連絡「基本的対処方針に基づくイベントの開催制限、施設の使用制限、業種別ガイドライン等の取組みの廃止に当たっての留意事項について」で、5月8日以降の感染対策は個人判断とし、イベント開催、劇場・ホールや社会教育施設等の使用等の制限が緩和された。そして5月には感染症法の5類感染症に変更となり「新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針」が同月8日で廃止され、連動して基本的対処方針に基づく様々な制限や業種別ガイドライン等も廃止された。クラシック音楽運営推進協議会は、4月21日に「新型コロナウイルス感染症の5類感染症への移行に伴うクラシック音楽公演における感染予防のご案内」で感染拡大予防を周知、一般社団法人全日本合唱連盟(以下「JCA」)は、5月20日に「合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン」を廃止した。

このような状況の中で、合唱界では果敢な取組みが復活した。東京混声合唱団は、1月に第260回定演(指揮・キハラ良尚)、3月に第261回定演(指揮・広上淳一)、6月に「コン・コン・コンサート」(指揮・本山秀毅)、8月に「東混八月のまつり44」(指揮とピアノ・寺嶋陸也)、9月に「東混オールスターズ～田中信昭と共に～」、9月に第262回定演(指揮・尾高忠明)、12月に第263回定演(指揮・下野竜也)と大阪定演No.28(指揮・水戸博之)の主催公演を開催した。また「合唱の輪」シリーズは、7月に「栗山文昭の世界」が開催された。新作は、寺嶋陸也、土田豊貴に委嘱されている。

室内合唱団日唱は、4月に第38回定演(指揮・片野秀俊)、10月に日唱アンサンブル演奏会「混声3部合唱の魅力」、8月に特別演奏会「山本直純・純ノ介・澄奈の世界」を開催した。

神戸市混声合唱団は、3月に春の定演「憧れ」、4月に「合唱コンクール課題曲コンサート」、9月に秋の定演「仏蘭西からの贈り物」(以上の指揮・佐藤正浩)、神戸市室内管弦楽団と5月にガラ・コンサート「神戸から未来へ」(指揮・山田和樹)、12月に合同演奏会(指揮・鈴木秀美)を開催した。地域連携策では、「あなたに贈るコンサート」を3回、「わがまちコンサート」を1回開催した。

びわ湖ホール声楽アンサンブルは、4月に第77回定演「言葉とともに」(指揮・田中信昭)、7月に「セタロビーコンサート」(指揮・大川修司)、8月に「美しい日本の歌」(指揮・本山秀毅)を、4月の「びわ湖の春 音楽祭」では「びわ湖ホール声楽アンサンブル公演」(指揮・田中信昭)と「0歳児からのコンサート」を開催したほか、「オペラへの招待」シリーズ、びわ湖ホールプロデュースオペラ等の公演にも出演した。さらに子ども達に舞台芸術に触れる機会を創出する目的で6月に「びわ湖ホール音楽会に出かけよう!」(指揮・阪哲朗)を京都市交響楽団と世界の名曲で構成したプログラムで、6日間12公演を開催した。

ヴォクスマーナは、3月の第49回定演で伊藤弘之と徳永崇、9月の第50回定演で鈴木治行と北爪裕道の委嘱新作、毎回のアンコールピースは伊佐直治の委嘱新作が初演された。

また、プロ合唱団のアウトリーチは、東混が、文化庁の学校巡回公演を22地域、その他のアウトリーチを10地域で、神戸市混声が、神戸市内の小学校(36校中、低学年30校、高学年25校)でアウ

トリーチを開催した。前述のびわ湖ホールの取組みも含め、子ども達向けに、文化芸術に直接触れ合う機会を創出する事業にプロ合唱団が注力し続けていることは、特筆すべきである。

オーケストラ演奏会では、オケ専属もしくはコロナ禍前から連携する合唱団との共演が復活した。複数回の演奏は、ブラームス「ドイツ・レクイエム」が5月に札幌、12月に九響、メンデルスゾーン交響曲第2番「讃歌」が5月に新日フィル、8月に東響、9月に「詩篇第42番」と合わせ紀尾井ホール室内管、ヴェルディ「レクイエム」が4月に大フィル、9月にモーツァルト「レクイエム」より「ラクレモサ」と合わせ群響で演奏された。他には、1月に日本センチュリー響がブラームス「哀悼歌」とブルックナー「詩篇第112番」、3月に都響がマーラー交響曲第2番「復活」とバルトーク「中国の不思議な役人」、東響がコネツソソ「Heiterkeit(合唱とオーケストラのためのカンタータ)」とシマノフスキ「スターバト・マーテル」、日フィルがシベリウス「クレルヴォ交響曲」、5月に京響がラヴェル「ダフニスとクロエ」第2組曲、都響が三善晃「レクイエム」「詩篇」響紋」、6月に名フィルがベートーヴェン「ミサ・ソレニムス」、8月に京響がラター「レクイエム」、9月に大響がブーランク「グロリア」、中部フィルがベートーヴェン交響曲第9番、10月に東響がヤナーチェク「グラゴル・ミサ」、日本フィルがマーラー交響曲第3番、読響がアイスラー「ドイツ交響曲」、11月に大フィルがシェンベルク「地には平和を」とツェムリンスキー「詩篇第23番」、日本フィルがオルフ「カルミナ・ブрана」、12月にN響がマーラー交響曲第8番「千人の交響曲」を定演で演奏した。

季節イベントでは、「東京・春・音楽祭」で「にほんのうたXII～東京オペラシンガーズ」と、合唱の芸術シリーズNo.10ブラームス「ドイツ・レクイエム」、2023セイジ・オザワ松本フェスティバルでブーランク「スターバト・マーテル」とラヴェル「ダフニスとクロエ」第2組曲、第43回草津国際音楽フェスティバルでドヴォルザーク「スターバト・マーテル」が演奏された。

合唱による文化芸術振興に奮闘する組織の取組みも本格的に再開した。

JCA(理事長・長谷川冴子)は、3月に「2023こどもコーラス・フェスティバルin茅ヶ崎」、第12回「JCAユースクワイア」、8月に「全日本おおかあさんコーラス全国大会」、全日本合唱コンクール(10月に中学校・高等学校部門、11月に小学校部門と大学職場一般部門)を開催、コロナ禍で中断した合唱講座「はじめてのコーラス」が7月、9月、12月に各2回開催で復活した。

一般社団法人音楽樹(理事長・藤井宏樹)は、3月に「春のアトリエ」がセミナー形式で2日間、GWに「Tokyo Cantat」が、第8回若い指揮者のための合唱指揮コンクールを5年ぶりに有観客開催でスタートし、コンサート2公演やセミナー等が、8月に「八ヶ岳ミュージックセミナー」が南聡と五十嵐崇未をゲストに4年ぶりに4日間、11月に「コロ・フェスタ2023in長野～善光寺、一度は参れ 歌を連れ～」がそれぞれ開催された。

一般社団法人日本合唱指揮者協会(理事長・名島啓太、2023年11月に法人化)は、6月3日から11日に、Nコンを学ぼう、Nコンを歌おう(いずれもオンライン配信)、指揮法個人レッスン、スペシャルコンサート「リーダーシップIV出版記念」で構成された「JCD A 合唱の祭典2023～第23回北とびあ合唱フェスティバル～」を開催したほか、6つのテーマ別に「JCD A コーラスアカデミー」を4月からオンライン講座で開始した。

一般社団法人東京国際合唱機構(理事長・松下耕)は、7月に第一生命ホールで「東京国際合唱コンクール」、8月に2年ぶりに「軽井沢国際合唱フェスティバル」第8回東京国際合唱作曲コンクール」を開催した。

2023年の合唱界は、コロナ禍の制約を克服して必死の取組みを復活させた一年だったと言える。